

値及び標準偏差がすぐれ、男女の差の顕著にあらわれるのは6才~11と14才以降であつた。(3) RTLは練習によりまた年齢の進むに従つて短縮され、しかも年少者ほど短縮の度合が大きく、練習による習熟効果も大きいことが認められた。

75. 反応時間の研究

お茶の水女子大学体育生理 渡辺俊男

私どもはここ数年来いろいろな反応時間の測定を行つて来たが、明快な結果はなかなか得られない。反応時間は個人差、あるいはその時のコンディションの状態によつて非常に異なるものである。しかも私たちが用いた検者の間では個人差よりも日々よる変動の方が遙かに大である。

光及び音を刺激として、単純反応時間といわゆる連続反応時間を測定した。練習効果は毎日1回ずつのシリーズで行つて4~6日で一応その人の言つた値の範囲内に入ってくる。

これらの反応時間を防害音にさらしながら測定すると、単純反応の場合はコントロールに対して有意の差が認められるが、連続反応時間の場合はこの差は縮少されてくる。

また反応時間と EEG の関係をみると、単純反応時間では、反応直後α波がよく発現するが、連続反応時間の場合はα波の出現様式は前者と異つている。

5秒間隔のリズムで刺激を与えた場合の連続反応時間においてはリズム感覚があると思われる被検者の方が、音と光の反応が接近している。

76. ラビットファイアーピストル射撃時の生理学的研究

自衛隊体育学校 羽生典正^o松本太刀雄
日本医大衛生 長谷部昭久 山内大三
三浦信雄

自衛隊体育学校に所属する特別体育学生については、昨年度の本学会でその一部、基礎的事項を報告した。

今回は比較的心理学の見地からのみ追及されていた射撃について種々生理学的面より検討したものを報告する。

77. 空挺隊員の性格について

陸上自衛隊第一空挺団空挺傷害研究班
岡村正明 中宮安夫

空挺隊員については空挺訓練生としての選考時厳重な精密適性検査を実施しているの、性格的に不適格な者は既に排除されており概念的には好ましい性格の持主が多いわけであるが、今回空挺隊員のうち健康者168名、長期傷害者44名、空挺訓練生102名、スカイダイバー20名計334名について矢田部ギルフォード性格検査(以下 YG テストと略称する。)を実施し、空挺隊員の性格についておおよその傾向を把握し得たのでその成果について報告する。

YG テスト成績を個々の特性即ち抑うつ性 D・気分の変化 C・劣等感 I・神経質 N・客観性 O・協調性 Co・攻撃性 Ag・活動性 G・のんき性 R・思考的傾向 T・支配性 A・社会的傾向 S の各項目別に把握するためには、分布係数を考えると便利である。YG テストでは各特性に應ずる標準点の 1・2・3・4・5 点に対して夫々 6.7%・24.2%・38.3%・24.2%・6.7% の割に分布する様子標準化されているので、この標準分布をもつて各特性に対する各標準点の百分率を割るならばこの数値の大小が個々の特性に対して一つの傾向を示す指標となる。これが分布係数である。

ある特性の分布係数がすべて 1.0 であるということは、その性格が標準状態にあることを示し、ここでは攻撃性 Ag がこうした状態に近いことがわかる。今分布係数の最も高いもの・最も低いものをマークして個々の特性をながめるとその傾向が可成り適確に浮ほりにされるのである。

健康な空挺隊員では D・C・I・N・O・Co の各特性が左よりの傾向にあり、G・R・T・A・S の各特性についてはほぼ右よりで甚だ好ましい結果を示している。

空挺隊員のうち長期傷害者についてみるならば特性 O が右より即ち主観的で自己本位になつているのが特徴的である。又特性 T が平均化しているのが目立つている。

空挺訓練生では空挺隊員(健康者)と殆んど同じ好ましい傾向を示しているが、ただ特性 R が空挺隊員に比べやや左よりになつているのは実降下という特殊環境に順応することの難かしさを如実に示しているものといえる。

情緒安定性(D・C・I・N)社会適応性(O・Co・Ag) 向性(G・R・T・A・S)の三要素を基準にして右下り型、左より型、平均型、右より型、左下り型の五つのタイプに分類し全体的な性格傾向をみると、健康な空挺隊員、空挺訓練生ともに右下り型が多く好ましい傾向にあることがわかる。長期傷害の空挺隊員では中心がむしろ平均型に移行し、右より型、左下り型等余り好ましくないタイプの者が前二者に比べ2倍以上の比較的高率にみられるのが特徴的である。スカイダイバーについては人